

---

# ネギま 千の呪文を継ぐ者

なのは四期アニメ化希望

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ネギま 千の呪文を継ぐ者

### 【Nコード】

N5524Y

### 【作者名】

なのは四期アニメ化希望

### 【あらすじ】

気が付くと目の前に少女が居て「あなたは死にました」的な事を…ふざけてんのか？  
え？転生？何そのテンプレ…逝くのは剣と魔法の世界…に近い感じの世界？

『ネギま』の世界に転生してネギの兄になる良がある話です。

「二番煎じ」じゃ済まされない！「千番煎じ」ぐらいかな…？

『黒い月の聖王』を書いている途中に思いついたかなりの駄文です。

## プロローグ（前書き）

無茶苦茶ですが許して下さい。なので細かい事は気にしないで下さい。マジで。

『黒い月の聖王』がメインなのでゆっくりです。

## プロローグ

「あんだ誰だ？」

俺は目の前にいる少女に質問する。

「私は神様なのです。えっへん！」

「…頭沸いてんのか？」

「違います！ホントに神様なんです！」

かなり必死だな…

「まあ、いいや。それよりここ何処だ？周りが本棚で囲まれた図書館っぽい…」

「良くないです！本当なんですって！」

しつこいな、此奴…

「ここは何処だか聞いてんだけど？」

「うゝ、ここは世界の全てが記録されている場所、まあ分かりやすく言えば、型月の『根源』や、某仮面騎士の『星の本棚』みたいな所である。」

「…頭沸いてんのか？」

「また同じ事言われました！？しかも今回は一方通行っぽいし！」

「いや普通の反応だろ。」

「むむむ…分かりました！証拠を見せるです！何が見たい？」

「そこはお前が決めるとこだろ！？」

「確かにそうですね…じゃあ、これ。」

そう言っただけの俺の恥ずかしい過去の映像を映し出す…って、

「デメエ…何でこんなことを知ってた…？」

「神様だから。」

なんか色々疲れた…

「もついいや…」

「そうですか？じゃあ本題に入りますです。」

「いきなり声のトーンが落ちたな。」

「貴方は選ばれた。」

いや意味わかんねえ。

「理由は…秘密です。ここまでで質問は？」

「有りまくりだ!!」

「そうですか…無いですか。」

「有るって言ったの聞こえなかったのか？」

「貴方は転生することになりました!」

無視か!!

「つて、転生!？」

「はい。転生する世界はランダムで決まる!あつ、能力も三つまで聞いてあげられますですよ。」

「…いきなり二次創作的展開…」

まあ俺もそう言うのに興味が有るけど。

「取り合えずどんな世界かだけ教える。」

「まあ少しだけなら…剣と魔法の世界…に近いです。」

に近い!?!剣と魔法の世界では無いのか!?

「じゃあ、能力三つあげてください。」

「どうせ抗議しても無視するんだろ?分かったよ…」

一つ目は魔法の才能。二つ目は魔法具を作る才能。

……これ以上浮かばない無いな。」

「ええ!?!チートじゃ無いですよ!?!それに後一つは!?!」

「じゃあ必ず転生後、男にしてくれ。」

「…分かりました。…詰まんないので勝手にいじろつと。」

「聞こえてんぞ!!」

「前世の記憶は自我が生まれると戻ります。」

また無視かよ…

「ちつ、まあいい。後一ついいか？」

「何ですか？」

「俺の家族を幸せにしてくれ。」

「もちろんです。ではいつてらっしゃい。」  
神様？がそう言つと意識が遠のいて行つた。

「えつと〜彼が逝く世界はこれだから、設定は……」

あのフザケた転生から4年、自我が芽ばえて2年がたった。

俺の新しい名前は、アスカ。

父親はナギ・スプリングフィールドで、母親はアリカ・アナルキア・エンテオフィシユア。

両親の名前で分かるように、かの有名な漫画『ネギま』の世界：しかも主人公の兄の立場…死んだな、コレ。

原作では分からなかったが、2人共かなりの親バカらしい。俺の急成長を全く不思議に思っていない所か、むしろ大歓迎している。

調べてみて分かったのだが、あの自称神様は才能をかなりいじつたらしい。その所為で魔法も適正がおかしい。

全属性普通以上、中でも雷と火はずば抜けている。

魔法学校に通わず、親父に風と雷、母さんに火と光の魔法を習っている。

才能のお陰で、雷は『千の雷』まで出来る。最近では『王家の魔力』の使い方も習い始めた。

家は京都にある隠れ家か、魔法世界の隠れ家を使っている。

時期はいまいちよく分からない。少なくとも大戦後でエヴァが呪われる前な事は確かだ。

取り合えず生き残るために力を付けよう。

## 闇の福音

「おらっ！『雷の暴風』！！」

「無詠唱かよ！」

【解放！】『奈落の業火』！！」

現在、俺は親父とわりとマジで戦っている。

「お返しだ！」

【プラクテ・ビギ・ナル、契約に従い、我に従え、高殿の王！来れ、巨神を滅ぼす、燃ゆる立つ雷霆！百重千重と、重なりて、走れよ稲妻！】『千の雷』！！」

「マジかよ！えっと…」

【百重千重と、重なりて、走れよ稲妻！】『千の雷』！！」

俺の『千の雷』と、親父の『千の雷』がぶつかり爆発を起こす。

「ほらよつと。」

爆発に紛れ、いつの間にか親父が後ろから『雷の投擲』を突きつけてきていた。

「クッソ！またかよ…」

「はっはっは！俺に勝つなんて十年はえ！じゃあ、メシよろしく！」

「わかってるよ！」

俺は今、親父の旅に御供している。その途中、アル、ガトウ、アスナ、詠春、ラカンとも顔合わせをした。

旅での食糧などの確保は試合で負けた方がするのだが…あまり前だが、いつも俺だ。

まあ、毎日戦ってるお陰でかなり強くなった。

どれぐらい強くなったかというと、得意属性は全て広範囲殲滅呪文を使い、さらにオリジナルの呪文を創るレベルだ。はつきり言ってるチートだ。

…親父に勝てないけど。

ちなみに魔法発動体は、先端がフックみたいになっている短い杖は

『千の雷』取得祝いの親父たちの貰った。

近くの川で魚を釣り、親父の所に戻ろうとしていると…近くの崖から金髪の女の子が落ちた…え？

「Why何故落ちる！？クソったれが！！」

瞬動を使い一気に近づくと崖の端に片手をかけ、もう片方の手で女の子の手を掴む。

「危ねー所だったぞ！クソガキ！！」

「クソガキだと！！」

女の子が何か言ってくるが無視して崖の上に戻る。

助けた女の子を見て…ってエヴァンジェリンじゃねえか！？これ本来、親父が助けるところ！？

「貴様は魔法使いだな？何故助けた？」

現実逃避していると何故か凄まれた。

「いや、普通助けるだろ…」

「私はあの程度では死なん！」

とりあえず無視して親父の元に戻る。

「おい！貴様聞いているのか！」

あー何も聞こえない。

「おいアスカ。こいつ誰だ？」

結局エヴァンジェリンはこっちに着いて来やがった。

「捨てられた子猫。」

焚いてある火の周りに釣ってきた魚を刺した棒を立てる。

「貴様…さっきから好き勝手言いおって…私は『闇の福音』だぞ！！」



「えっ何？《夏の風鈴》？」

「もはや原型が分からないじゃないか！？舐めてるのか！？」

そろそろ真面目に話すか。

「…親父、任せた。」

「俺かよ！？」

自分だけ安全圏で笑って居られると思ってるのか？

「はあ…しょうがないな。で？何が聞きたい？」

「貴様等は誰だ？」

「俺はナギ・スプリングフィールド。んでこっちは息子のアスカ。」

「何！？貴様があの《千の呪文の男》だと！？しかもこっちは息子！？」

面白いぐらい驚いてるな。

「ああ、何ならアスカと戦ってみるか？」

こっちに振りやがった！？テメーはバトルジャンキーだろ！戦えよ！

「お前も今まで、ほとんど俺としか戦ってないだろ？良い経験になるぜ？」

「ちっ…わかったよ。」

「いくぞ！

【リク・ラク・ラ・ラック・ライラック、来れ氷精、闇の精！】」

「いきなり！？

【プラクテ・ビギ・ナル、来れ雷精、風の精！】」

「【闇を従え、吹雪け、常夜の氷雪！】

「【雷を纏いて、吹きすさべ、南洋の嵐！】」

「『闇の吹雪』！！」

「『雷の暴風』！！」

二つの魔法がお互いを相殺する。その隙に距離をとる。

「凄い才能だな…」

「お褒めに与り光荣だ。」

「しかし…明らか年齢と技術がおかしいだろ…」  
「そう思いますよね…普通…」

「さて少し本気を出そうか！」

【リク・ラク・ラ・ラック・ライラック、闇の精霊501柱！集い  
来たりて敵を射て！】『魔法の射手 闇の501矢』！！」

「ちよっ！多いつて！」

【プラクテ・ビギ・ナル、九つの鍵を開きて、レーギャルンの筐  
より出て来たれ！】『燃え盛る炎の神剣』！！」

アスカは次々と迫り来る射手を落としていく。

「【リク・ラク・ラ・ラック・ライラック、契約に従い、我に従え、  
氷の女王！】」

「っ！？」

【プラクテ・ビギ・ナル、契約に従い、我に従え、高殿の王！】」

「【来れ、永久の闇、永遠氷河！】」

「【来れ、巨神を滅ぼす、燃ゆる立つ雷霆！】」

「【全てのものを、妙なる氷牢に、閉じよ！】」

「百重千重と、重なりて、走れよ稲妻！】」

「『凍る世界』！！」

「『千の雷』！！」

結局負けたのは俺だったんだが…めんどくさい事になった。

「今、何だったんだ？エヴァンジェリン？」

「私のものになれアスカ。それと長いからエヴァで良い。」

「…プロポーズ？」

「違うわ！！従者になれと言っているんだ！」

「…丁重にお断りします。」

そう言つてある魔法を発動させる。

「待てアスカ！俺に押しつける気か！？」  
俺の意図に気付いた親父の声を無視して、さっさと炎を使った転移で逃げた。

「と言うわけで、しばらくみんなの所を廻ろうと思う。」  
「まあ…いいじやろう。」  
唐突だけど、俺はナギ達を漫画のキャラでは無く、しっかり両親と  
して見ている。  
「何かあったら直ぐ知らせるのだぞ。」  
「りょーかい！んじゃあ、行ってくるわ！」  
「気をつけるのだぞー」

「と言うわけでしばらくここに居るから。」  
「いや、全く意味分らないんだが…まあ今はタカミチ君は居ない  
し、いいぞ。」  
まずはガトウの所に来た。ちなみにアスナも居ます。  
「アスカ！一緒に暮らすの？」  
「おう！よろしく！アスナお婆ちゃん。」  
「アリカ直伝…」  
「はい？」  
「…王家のビンタ。」  
「ぶべらっ！？」  
アスナちゃんの攻撃を喰らい吹き飛ぶ。  
「嬢ちゃん…今のつて…」  
「嫌なこと言われたらやれ…ってアリカが…」  
何教えてんの母さん！？

「そうか…」

ガトウ冷や汗掻いてんじゃねえか…

「ガトウ！頼みがある。」

直ぐに復活して話を変える。

「ん？なんだい？」

よそを見ていたガトウがこっちを向く。

「感卦法と無音拳を教えてくれ！」

「構わないが…お前、感卦法はかなり時間がかかるぞ。それでも良いか？」

「ああ、頼む！」

《完全なる世界》と戦うためには力が必要からな…

## 闇の福音（後書き）

話の展開が早いです。

アスカの杖は原作でとあるキャラが持っています。

## 呪文開発（前書き）

かなり無茶苦茶ですが、見逃して下さい。 o y z

## 呪文開発

「ガハハハ！そうか詠春にもガキが出来てたのか！！」  
久しぶりに《紅き翼》&俺と母さんとアスナちゃんが集合して騒いでいる。

「ああ、これでもかってぐらい可愛いんだ！」

キヤラ崩壊してんぞ！詠春！！

「うむ！赤子はまるで天使じゃならの！」

なんか母さんと意気投合してる！？

「ジャックはどうなんだ？相手でも見つかったか？」

「んなもん見つかるわけねえーだろ！」

何で嬉しそうなんだ？

「タカミチは若いから良いよな…」

「しっ師匠もまだ若いですよ！！」

ガトウは落ち込んでタカミチが必死にフォローしてるし…

「アス力は誰が良いですか？」

アルが俺に聞いてくる。

俺を巻き込むな！！！！

あのカオスな騒ぎから一夜明けた。

防波堤の上で、ガトウがタカミチに咸卦法を教えていた。

俺とアスナちゃんは側に座りそれを見ている。

「いいか？左手に魔力！右手に気…」

ガトウが咸卦法をやってみせる。

「左手に魔力…右手に…うわっ！？」

タカミチがガトウを真似て咸卦法を発動させようとするが失敗する。  
「ダメだ、ダメだ。いいかタカミチ。自分を無にしろ、そんな調子

「じゃ5年は掛かるぞ？」

「ハ、ハイ！」

「…」

それをアスナちゃんが真剣に見つめている。

「よお！姫様は今日も元気か？」

そう言いながら親父達が現れる。

「あつナギさん、皆さん！おはようございますー！」

タカミチが慌てて挨拶をする。

「バーカ、タカミチ。ナギさんはやめろつつってんだろ。ナギでいつての！」

「そうだぞタカミチ、親父はバカだからな。」

「んだとアスカ！もう一遍言って見ろ！」

「なんでもねーよ。」

「何をやってたんだ？」

親父と一緒に来た詠春がタカミチに訊ねる。

「あ、いえっガトウさんに少し修行を…」

「左手に魔力…」

説明しているタカミチの後ろでアスナちゃんが感卦法をやるうとしていた。

「右手に気…」

「おおっ！？」

一発で成功させた！？

そう言えばこんな場面あつたな…

「…」

「ハッハッハ！抜かれたなタカミチ君！」

啞然としているタカミチの肩に詠春が手を置く。

「これなら将来良い魔法使いの従者になれますね。」

「ハハハ！嬢ちゃん、オジサンのパートナーになるかい？」

ガトウの言葉にアスナちゃんが首を振る。

そしてこっちを向く。やな予感が…



「…アスカがいい」

やっぱりかあ！！

「お…！」

「プ…」

親父イ！何で嬉しそうなんだよ！

そしてアル！笑ってんじゃねえ！

「良かったなアスカ…！」

「何が良いんだクソ親父…！」

「年齢的には今が一番可愛いですよ？それに見た目は同じ年ぐらいですし。」

「ロリコン有害指定図書は黙ってる…！」

「やっぱりオジサンは嫌か…」

「アスナちゃんはタバコが嫌いなんですよ…！」

あれから数日間騒ぎ倒し解散する事になった。

「んで？アスカはどうするんだ？」

親父が聞いてくる。

「ああ、無音拳と感卦法は一樣取得できたし…アリアドネーの魔法学校にでも行こうと思ってる。この前セラスに誘われたしな。」

「アスカ…一緒に来ないの？」

「三、四年ぐらいしたら合流すよ。」

「分かった…」

アスナちゃんが頷く。

「んじゃあ解散だな！みんな元気にしろよ！」

親父の声に返事をしてみんなと別れた。

炎の転移を使い校長室に侵入する。

「うーす！セラス居るか？」

「…いきなり転移して来ないでくれないかしら？毎回ビックリするのよ…」

セラスが疲れたように言う。

「わりーわりー。」

「はぁ…で？どうしたの？」

「この間のお誘いを請けようと思ってね。」

「ホント！？」

セラスが突然席を立つ。

「ああ、新呪文を幾つか完成させたいんだ。」

「…また作ったの？まあ良いわ。」

「一樣、立場としては特待生で良いかしら？」

「ああ、それで頼む。」

「すぐに部屋を用意させるわ。」

「サンキュー。」

用意された部屋は普通の生徒用と同じものにして貰った。

荷物の整理が終わると直ぐに図書館に向かった。

「まずは『太陽の如き剣』と『雷霆の槍』を完成させて…アレ？必須魔法一覧に『雷撃武器強化』が無い…『氷結武器強化』も無いな…」

原作では綾瀬夕映が使ってたし…ちょっと気になる…

「よし！探すか。」

「無いな…」

調べた結果、何処にも書いていないことが分かった。

「…俺が作るか？」

面白そうだし…やるか！

「どうせなら全属性作ってやろう。」

完成したら術式はセラスにでも渡すかな。

アリアドネーに来てから四年ほど経った。新呪文の開発は順調に進んでいる。

今は新たに完成した呪文を試そうと近くの森に来ている。

「うゝん…ちょうど良い魔獣はなかなか見つからないな…」

一人でぼやいていたその時、

「きゃあッ！？」

「ん？」

目の前に黒い短髪の少女が飛び出してきた。

さらに…

「G A O O O O O O O O ! !」

火竜も出て来た…何で！？

「ひい！？」

女の子に向かって爪が振り下ろされる。

「チッ！」

とっさに縮地クラスの瞬動を使い女の子を助け出す。

「大丈夫か？」

「へ？あっはい…」

女の子は啞然としながら返事をした。

普段なら入っては行けない森だけど私は興味本位で足を踏み入れてしまった。

運が悪く竜種の中でも中の下クラスの火竜に見つかり追われていた。

「きゃあ!？」

木の根に足を取られ倒れてしまった。

「ひい!？」

振り上げられた爪に目を瞑ってしまふ。

しかし衝撃は来なかった。

恐る恐る目を開けると英雄ナギ・スプリングフィールドに似た少年の腕の中にいた。

「大丈夫か？」

「え？あつはい…」

啞然としながら答える。

「少し此処で動かないでね？」

そう言う私を地面におろし結界を施した。

「ちょうど良い相手だな…」

【ヴィ・ヴェリ・ヴニヴェリスム・ヴィヴウス・ヴィク、我が手より昇れ、閃光の如き輝く稲妻!】

彼は今まで一度も私が聞いたことのない呪文を唱える。

「『天に墜ちる雷』!！」

呪文が完成したと同時に、彼は地面に手を付いて言う。

次の瞬間、火竜の足下から上に向かって雷の柱が昇る。

「GUOOOO!！」

火竜は苦しそうに叫び声をあげ気絶した。

side out

なかなかいい感じだな…

呪文も結構作ったことだし、そろそろガトウ達と合流するか…

「あの…」

「うん？」

「ありがとうございます。」

先程の少女が頭を下げる。

「あゝ、気にしなくて良いよ。それより此処から帰れる？」

「えっと…その…」

やっぱりか…

「じゃあ総長の所まで連れて行つてあげるよ。」

そう言つて炎の転移を発動させ、少女を連れてセラスの元に戻つた。

「もう行くの？」

「ああ、また来ると思つから。」

少女の保護者が連れていった後セラスに出て行くことを説明する。

「そう…いつでもいいから。」

「ああ、んじゃあ世話になつたな。」

そう言つて総長室をでた。

## 呪文開発（後書き）

・天に墜ちる雷

詠唱「我が手より昇れ、閃光の如き輝く稲妻！」

地面から敵の足元などから敵に向かって登る雷。相手が避けにくい代わりにコントロールが難しい。威力は『白き雷』の数倍。

## VS完全なる世界（前書き）

かなり無茶苦茶ですが、見逃して下さい。 o y z

## V S 完全なる世界

アリアドネーを出て再びガトウと合流した。

少し前に母さんからネギが生まれた、との手紙が来たのでそろそろ親父が行方不明に成る頃だろう…させる気はないが。

「どっち…」

アスナに急かされ現実に戻る。

「右だ！つて違った！」

「私の番…」

「さあ！どっちだ？」

「こっち…」

「負けたー！！」

え？何してるかって？ババ抜きだよ！

「トランプ…しかも2人でよくそこまで騒げるな…」  
呆れた顔でガトウが言う。

「2人なのはお前が混ざらないからだろ！ガトウ！」

「私、飽きた…」

「アスナちゃんまで！？」

騒ぐ俺を無視してガトウがイスに座り手紙を出す。

「誰からだ？」

「ナギからだよ。」

「親父から？文字書けたのか…」

「…お前かなり酷いな…」

そう言いながらガトウが手紙を開ける。

「……………これは…」

「どうした？いきなり真面目な顔になって。」

ガトウは返事をせず手紙を渡してくる。

「……………マジかよ…」

…噂をすれば何とやらってか？…噂はしてないが。



「どうしたの…?」

アスナちゃんが不思議そうに聞いてくる。

「ああ、ちよつとマズいことが書いてあつてな…」

ガトウに目配せをして外にでる。

「…行くのか?」

ガトウが訊ねてくる。

「ああ…その為に力を付けたんだならな。」

「奴らは…《完全なる世界》は強いぞ。」

ガトウが諭すように言う。

「分かつてる。…アスナちゃんを頼む。」

「それが俺の役目だ。しっかりやるさ。」

「…気をつけてな。」

「ああ!」

そう言つと、炎の転移を発動させる。まずは母さんと合流だな。

「母さん!」

家に入るといつもの普段着ではなく、漫画で見た戦争中の服を着て剣…『王剣』を側に置き、準備をしている母さんが居た。

ネギは既に預けたのか居ない。

「帰つたのか…」

「ああ、親父からの手紙がガトウの所に届いた。」

「そうか…着いてくる気か?」

母さんが聞いてくる。

「ああ、止めても無駄だぞ。」

「分かつておる。ただの確認じゃ。」

準備が終わつたのか王剣をとる。

「行くぞ!まずはアルビレオの所じゃ!」

「了解!」

「見えてきたぞ！」

母さんが叫ぶ。

「あれか…俺は転移で奴らの後ろに回り込む！」

「気をつけるのじゃぞ。」

「【…全ての者を、妙なる氷牢に、閉じよ！】」

確か《水のアダド》セプテンデキム…だったけ？の詠唱が聞こえる。

「ッ！？妾は先に行くぞ！！」

そう言うのと親父の方に行く。いや…多分親父ならアレ喰らっても平気だと思っけど…

って母さんもうちょっとましな助け方無いのかよ…

「きつ貴様は！アリカ！？」

「俺もいるぜ！！」

《風のアーウェルンクス》セクンドウムの声に付け足しながら、後ろに転移し全力の蹴りを放つ。

「グウ！？」

魔力強化をした蹴りをモロに喰らいセクンドウムが吹き飛ぶ。

「アスカまで来たのかよ！！」

親父の声を無視して、小さいアーウェルンクス…フェイトに攻撃を仕掛ける。

「まさか《千の呪文を継ぐ者》サウザンドマスター・セ「」ンドまで来るとはね…」

えっ？何それ？二つ名？要らないんだけど…

「誰だ？それ付けたの…まあいいや、取り敢えず喰らっつけ」魔法の射手 収束・雷の101矢！！」

前回の戦いから一週間経った。

今はラカンと詠春を連れてきて作戦会議中だ。

「今度はこっちから仕掛けるぜ！」

親父が言い放つ。

「良いですが…敵の居場所は分かっているのですか？」

アルが親父に訊ねる

「それは…」

分かっているのかよ！よく自信満々に、こっちから…とか言えたな！

「場所ならタカミチから聞いておる。《墓守の宮殿》じゃ。」

おおゝさすが母さん。

「あそこで戦うならアレ（・・・）が居るはずですね…」

造物主か…

「そうになると、ナギにはアレの相手をして貰う事になるな。」

詠春が頷きながら言う。

「後はセクンドウムが面倒ですね。あの肉体雷化は普通ならさわれません。」

あれ？確か原作だとフェイトに殺されて居ないんだよね…

「そうなのか？アスカは普通に蹴っ飛ばしておったが…」

アルの言葉に母さんが言う。

「多分バクキヤラだからでしょう。取り敢えずセクンドウムに攻撃を加えられ無いので、私とアリカ様は無理ですね。」

「親父もアレと戦うから無理だし、鍵持ちだからラカンも無理。」

「そうするとアスカか詠春の2人に限られますね。」

アルが俺と詠春を見ながら言う。

「じゃあ、俺とアスカでアーウェルックス2人をどうにかしよう。」  
詠春が言う。

「んじゃあ俺は火の嬢ちゃんだな。」

さっきまで話に加わっていなかったラカンが言う。

「では私はディナミスを。大戦の時に戦いましたからね。」

「そうすると妾は必然的に水じゃな。」

墓守の宮殿に入ると、セクンドウムを含む5人が待つて居た。

原作と同じならフェイトに殺されているはず何だが：イレギラーか！

「予定道理、俺は造物主を探して潰す！此処は頼むぞ！」

親父は念話すると同時に駆け出す。

「テルティウムを任せた！」

「分かった！」

詠春に念話を送り戦闘に入る。

「一週間ぶりだな、アーウェルンクス！」

『魔法の射手 雷の千一矢』！」

「クツ！無詠唱の初歩魔法でこの威力：！」

フェイトは障壁で防ぎながら避け、セクンドウムは肉体雷化を発動させ避ける。

それを見て、俺は前回の戦いからの一週間を使って作り出した身体強化魔法を使う。

「いくぜ！！」

【ヴィ・ヴェリ・ヴニヴェリスム・ヴィヴウス・ヴィク！】

『戦いの旋律・雷』！！」

雷を鎧の様に体に纏う。

「何をしようと、キサマのようなガキでは私は捕まえない！！」

「それはどうかな？」

雷の速度で後ろに回り込んできたセクンドウムに拳を叩き込む。

「何！？」

攻撃を受け、体が一瞬止まった隙に後ろに回り込み蹴りを放つ。

「グツ！私と同じ速度だと！？」

なんかホント咬ませ犬っぽい奴だな…

「【ヴィ・ヴェリ・ヴニヴェリスム・ヴィヴウス・ヴィク、目醒め現れよ、燃え出づる火蜥蜴！火を以てして敵を覆わん！】『紫炎の

捕らえ手』――」

完全詠唱の捕縛魔法を発動させ、セクンドウムを捕らえる。

「この程度十秒有れば抜け出せる――」

「その十秒で叩き潰す！」

【ヴィ・ヴェリ・ヴニヴェリスム・ヴィヴウス・ヴィク、九つの鍵を開きて、レーギヤルンの筐より出て来たれ！】『燃え盛る炎の神剣』――」

手に超高密度に圧縮した炎の剣を作る。

「バカな：超高等呪文だと！？」

「さつきから同じ様な事しか言つてねーな、オイ！」

そう言いながら『燃え盛る炎の神剣』を振り下ろすが寸前の所で避けられる。

「おのれっ――」

【ヴィシュ・タル・リ・シュタル・ヴァンゲイト、イグドラシルの恩恵を持つて、来れ貫くもの！】『轟き渡る雷の神槍』――」  
俺の剣とセクンドウムの槍がぶつかり合う。

「【ヴィシュ・タル・リ・シュタル・ヴァンゲイト：】」

「【ヴィ・ヴェリ・ヴニヴェリスム・ヴィヴウス・ヴィク：】」  
同時に始動キーを唱える。

「――【契約に従い、我に従え、高殿の王！】――」

互いに剣と槍を破棄して殴り合いながら詠唱をする。

「――【来れ、巨人を滅ぼす、燃え立つ雷霆！百重千重と重なりて、走れよ稲妻！】――」

詠唱が終わると同時に後ろに下がり雷系最大の呪文をぶち込む。

「――『千の雷』――」

千の雷が発動するとすぐに別の呪文の詠唱にいる。

「【ヴィ・ヴェリ・ヴニヴェリスム・ヴィヴウス・ヴィク、契約に従い、我に従え、火の精霊！集い来たりて、敵を討て！】『紅蓮蜂』――」

未だ煙が晴れていないセクンドウムが居る方向に放つ。

「グガアアア!?!」

爆発音と共にセクンドウムの悲鳴が聞こえる。

煙が晴れるとそこには、下半身と右手を失い地面に倒れているセクンドウムがいた。

「バカな…造物主の使徒たるアーウェルンクスの私が人間のガキに負けるなど…」

俺を睨みながらそう言うのを無視して近づく。

「じゃあな、人形。」

そう言つてセクンドウムの頭に『紅き焰』をぶち込んで燃やし尽くした。

セクンドウムを倒して直ぐに、俺は詠春の元に向かった。

「詠春!?!」

「アスカ!?セクンドウムは倒したのか!?!」

「ああ!テルティウムは俺が引き継ぐ!詠春は親父の援護に向かつてくれ!」

「大丈夫か?」

「ああ…だが流石にアレと戦うだけの魔力は残って無い。」

「…分かった。死ぬなよ!?!」

そう言つて詠春は親父の魔力の方へ向かう。

「もう良いかな?」

「悪いな待つて貰つて。」

そうテルティウムに返事をする。

「まさかセクンドウムを倒すとは思つてなかったよ。」

そう言いながらテルティウムは石の大剣を作る。

「正直死ぬかと思つたがな。」

俺は先程破棄した『燃え盛る炎の神剣』を再び作る。

一瞬で間合いを詰め剣を振り下ろす。

「君はどうしてそこまで頑張れる？この世界の秘密を知っているの  
だろう？」

「ふん！知っているさ！貴様等がやろうとする事の原因もな！！」  
「まずいな…魔力がかなり少なくなってきた…」

「ならば何故戦う？力ではどうしようもないのも、分かっているの  
だろう？」

「はん！だからどうした！人間舐めんな！！」

そう言いながら渾身の一撃を振り下ろし、石の大剣を砕きフェイト  
を吹き飛ばす。しかしその反動で太陽の如き剣も炎に戻ってしまう。  
「くっ！」

『千刃黒曜剣』！！』

体勢を崩した俺に向かって無数の黒い刃が襲いかかってくる。

「ちっ！ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグ直伝！

『千条閃鏃無音拳』！！』

直ぐに体制を立て直してポケットに手を入れ、千の無音拳で黒い刃  
を叩き落とし、さらに障壁を破壊する。

「『千の雷』！！』

止めに無詠唱で雷系最大の呪文を決める。

「はあ、はあ、はあ、やったか？」

これで終わったら、楽なんだが…

ゾク！！

突然寒気に襲われる。と次の瞬間、後ろから腹を何かに貫かれる。

「ゴフツ！」

口から血を吐く。

「『アスカ！！』」

倒れそうになる体に力を入れ後ろを向く。

「親父…いや、造物主か…」

クソ…結局こうなるのかよ…親父…

「待って居れアスカ！直ぐそちらに行く！」

母さんの声が聞こえる。

「我が使徒を2体も倒すとは…素晴らしい才能だ、我が末裔よ…」  
造物主が一瞬で目の前に現れ、首を掴む。

この距離なら…

「【……………】」

「声が小さいくて何を言っているか分からんぞ？」

「デメエ…がいくら強く…ても…この距離なら…少しは効く…だろ？」

造物主の手を思いつきり掴む。

「キサマッ！？」

造物主が慌てて離れようとするが…

「零距离…『千の雷』！！」

そこで俺の意識は途絶えた。



## V S 完全なる世界（後書き）

『戦いの旋律・雷』

戦いの旋律を基にアスカが改良した肉体雷化魔法。

闇の魔法に比べ出力や多様性が劣る代わりにデメリットが無い。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5524y/>

---

ネギま 千の呪文を継ぐ者

2011年11月25日23時08分発行